

## 学びへ向かう力を育てる国語科の授業・評価を目指して —書くという表出方法を通じた自己評価と教師の支援・評価の在り方— 河合 ゆみ（京都市総合教育センター研究課 研究員）

新学習指導要領が公示され、育成すべき三つの柱として「知識・技能」「思考力・判断力」「学びに向かう力・人間性等」が示された。そして、それらの力を育成するために「主体的・対話的で深い学び」の実現がより一層求められている。国語科においては、すでに対話的な学びが多く取り入れられ、実践されてきている。しかし、そのような学びは、生徒自身の「上手く伝えたい」「もっと考えたい」という意欲が土台にあってこそ成り立つものである。自ら学ぼうとするためには、授業を通して生徒自身が学びの自覚を得ることが重要であると考えた。研究初年度は、書くという表出方法を通して、生徒が自分の学びを自覚し、学びへ向かう力につなげていけることを目指して実践を進めた。

### 第1章 「学びへ向かう力」とは

#### 第1節 本研究での「学びへ向かう力」

新学習指導要領に示された「学びに向かう力・人間性」との関係、国語科における「学びへ向かう力」をどのように捉えているかについて述べている。「学びに向かう力」については、「学びを人生や社会に生かそうとする」という文言が付随しているように、生き方という大きな枠組みでの力を指している。その力を少しずつ時間をかけて養っていくのは、日々の授業である。本研究での「学びへ向かう力」とは、授業の中で自ら学ぼうとする力を指している。また、国語科における学ぼうとする力とは、言葉を通じて自分で考え、自分の考えを伝えようとする、他者やテキストの言葉との出会いを通して、自分の見方や考え方を広げ深めようとするということであると捉えている。

#### 第2節 現状と課題

##### —全国学力・学習状況調査より—

平成 29 年度全国学力・学習状況調査アンケート結果から、話し合いなどにより自分の考えを広げ深められていないと感じている生徒が約 35%、指導者が約 25%いることが分かる。また、人の話を聞くことよりも、自分の考えを伝えたり、書いたりすることの方に難しさを感じていることも結果として表れている。これらの課題を解決するためには、生徒自らが自分の考えをもち、その考えを表現できるような授業の在り方を考える必要がある。

また、本市の現状として、生徒たちの日常生活において自ら考える活動よりも受け身的な活動が多いことが挙げられる。さらに、国語科においては他領域と比較し、「読むこと」の領域に課題がある。そのことも踏まえ、研究を進めた。

### 第2章 「学びへ向かう力」を育てるために

#### 第1節 本研究における四つの重点

本研究を進めるにあたり、重点として以下の 4 点を挙げている。

1. 書くという表出方法
2. 生徒自身による振り返り
3. 対話
4. 教師による支援と評価

一つ目に挙げた「書くという表出方法」は、生徒自身が自分の学びを見つめ直したり、今の自分と前の自分を見比べたりするためのものである。今と前の自分を比較し、自分の学びを生徒自身が見取ることが二つ目に挙げた生徒自身による振り返りである。自分の考えを書いて残していくことで、このような振り返りが可能になると考えている。振り返る中で、自分の学びを自覚することができれば、次の学びへもつながるのではないかと考えた。さらに、このような前と後の変化を求めるときに不可欠なものが三つ目に挙げた対話である。特に他者との対話において「書くという表出方法」が有効に働くと考えている。

また、意味ある対話にするためには、課題解決の視点を与えるなど教師の支援も不可欠である。本研究での教師による評価とは、生徒自身に学習の成果を実感させ、今後の成長を支えていくことを目的としたものである。

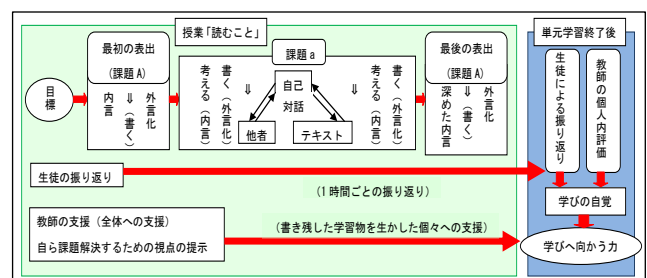


図1 書くという表出方法を中心とした実践の流れ

## 第2節 実践を進める上での具体的な手立て

実践授業における具体的な手立てとして以下の3点を挙げている。

1. 考えの過程を可視化するためのノート・ワークシートの活用
2. 効果的な対話にするための課題設定と課題解決に導く視点の提示
3. 学びの自覚を促すためのチャレンジ問題実施

## 第3章 「学びへ向かう力」を育てる授業・評価の実践

### 第1節 各実践における目標と授業の流れ

1年生、2年生の実践で、説明的文章と文学的文章をそれぞれ一教材ずつ扱った。新学習指導要領や教科書の内容をもとに、目標を定めた。四つの実践全て、「自分で考える→対話をする→自分で考える」というシンプルな授業の流れのもと行った。その中で、テキスト・他者・自己との三つの対話が効果的に働くことを意識した。他者との対話の方法としては、ペア・グループ・全体やジグソー学習、討論など、教材や生徒たちに応じて多様な方法を取り入れた。

### 第2節 授業を進める上での工夫

目標を達成するための最も大きな課題を設定するにあたり、課題の答えとして「納得できるか・できないか」など選択できたり、キーワードなど短い言葉で答えたりできるもの考えた。その後、そのように考えた根拠を説明することになるが、仮に最初の段階で詳しく書けなくても、選択だけでもできていれば、最後に書いたものと比較しながら、自分の学びについて振り返ることができる考えた。

また、教師の支援として、生徒が自分たちで課題解決していけるように、解決するための視点を与えた。視点を絞って考えさせたり、その視点を複数用意したりすることで多様な読みができるのではないかと考える。

### 第3節 生徒の様子—対話と振り返りから—

協力校である二つの学校で実践をしたが、どちらの学校においても有意義な対話になった。振り返りにも、他の人の考えを聞いて深まった、自分の考えがはっきりしたと書いている生徒が非常に多かった。最後の表出場面では、自分と他者、自分とテキストとの往還を経て、もう一度自分と向き合い、自分の考えを言葉として書き出している様子がみられた。対話の中で、自分以外の考えを

知ることだけでなく、自分の考えを説明しているうちに「そうか!」と新たな気づきを得たり、お互いに考えをぶつけ合う中で深めていったりする姿が印象的であった。最後の振り返りの場面では、その深まりを実感した記述も多かった。

### 第4節 教師による個人内評価

教材の学習終了後に、教科書とは異なる文章を用いたチャレンジ問題を実施した。授業の過程を思い出しながら取り組める問題を意識し、目標として掲げた力が身についたか、授業での学習を生かしたか確認するものとした。学びの自覚化や次の学びへとつなげることを目的としているため、生徒に返却する際は点数やABCなどの数値的評価はつけず、コメントのみを記入した。コメントの内容は主に以下の2点である。

- ・学習したことが生かしているところ。
- ・さらに力を伸ばしていくために必要なこと。

## 第4章 実践研究を通して

### 第1節 成果と課題

最初に自分で考えて書くということは、選択するなどの課題設定によって、どの生徒もできていた。また、一人一人が自分の考えをもった上で対話に臨んだことから有意義な対話となり、最後の表出においては、全ての生徒に変化が見られた。振り返りの中で、自分の考えの深まりを実感している生徒も多く、学びの自覚につながったのではないかと考えている。生徒の記述に「自分が何を思い、どう考えて答えを出したのかを文章や言葉で表すときに必要な力を学べた」とあり、本研究の中心とした「書くという表出方法」によって、内言を外言化する力を養うことができたのではないかと考えている。

しかし、書くという表出方法は最初と最後の表出については効果的であったが、対話など学習の過程において必要な内容を記録しない生徒もおり、ノートの活用の仕方には課題が残った。

### 第2節 今後に向けて

事後アンケートにおいて、学びの自覚の獲得に関する質問項目に関してはほとんどの生徒が肯定的な回答をしていた一方で、約10%の生徒が自分の意見を書こうと思えないと答えていた。生徒が考えを書こうと思えるよう、さらなる手立ての工夫が求められる。10%の中には、書ける生徒も書けない生徒もおり、得意不得意に関わらず、その生徒に応じた関わり方が大切だと再認識した。